

【審査員賞】 【佐藤 優 選】

No.23 「TOWER+GARDEN × HOUSE+□」

長谷川聡 安田女子大学 家政学部 造形デザイン学科 長谷川研究室、伊藤健生、丸山唯花

受賞コメント

人口が都市へ流出し過疎化と超高齢化が同時に進む北海道白老町は、近く大地震による津波が予見されているが防波堤すらない。

町予算での防波堤建設は現実的ではなく、町民は不安を抱えながら生活している。

具にフィールドリサーチを行いハードに頼らず、いかに災害時に町民を逸早く安全に避難させることができるか、民間資金を活用した集合住宅を建築し、津波避難施設として活用していく提案を減災として評価いただくことができた。



評価コメント

震災時の津波に対応できる中高層の住宅を建てるなら、建物が立つ場所ごとに異なる津波被害のシミュレーションとあわせて、被災後の生活再建プロセスの考察も期待します。（齊木）

提案の基盤となったのは人口16,000人ほどの白老町である。三陸の津波の時に中高層のビルの屋上で救助を待つ姿が印象的であった。しかし、一般的なこの程度の大きさのまちではなかなか需要がないし、大規模な堤防なども困難である。スペアハウスや公益的な観点から避難場所として用意しておく、という発想は、近くに高台がない街では現実的な提案である。実現するためのパターンをいくつか用意しておくと言説力が増すのではないか。（佐藤）

過疎地での避難施設は重要。提案ではリゾート地での別荘としての建設とされているが、公営住宅の立替で高層化しても良いのでは。（相良）

課題の着眼点は良かった。地方自体位の財源逼迫に対し、民間企業活力を活用する案も可能性はあると感じる。が、具体提案には、盛り込んだ諸々のアイデア・要素に必然的な効果を感じられない点も多く、描いた発想の価値を後から理屈づけしている感じがある。必要とされる機能を設計すると、本当にこのようなビルになるのか？を問わなければならない。最も重要な点は、地域の津波避難の拠点として機能するということだ（それは大変結構なことだ。）が、13Fというフロアに設定する根拠がわからない。住民はそこにどのようにアクセスできるのか、しやすいのかもイメージがわからない。ブラックアウトを経験した方としての発案の割には、13Fまでエレベーター移動を前提としている様子で、全フロアを繋ぐ階段の位置が見えない。（平林）